

平成二十年三月

蟹江町歴史民俗資料館

年報

第二十八冊

目次

一 「沿革誌」より	1
二 事業概要	2
三 資料の収集・保管	3
四 展 示	12
五 調査・研究	15
六 情報提供	17
七 教育普及	18
八 庶務報告	26
九 文化財保護	27

蟹江町歴史民俗資料館特別展示

「館蔵品に見るふるさと蟹江の文化」



小酒井不木俳句 木村晴三画 掛軸より

平成18年11月4日(土)～12月3日(日)

(月曜・祝日休館) AM9:00～PM5:00

場所 蟹江町産業文化会館1階 企画展示室 (蟹江町大字今字蟹江浦23-4)

主催 蟹江町教育委員会

問い合わせ先 生涯学習課歴史民俗係(歴史民俗資料館)

特別展開催にあたり

蟹江町歴史民俗資料館では、平成6年度から郷土蟹江の文化人に関する資料の購入事業を推進してまいりました。まずは当町出身の探偵小説家小酒井不木、画家林稼亭、宗教学家山田玉田を始めとする関連資料の収集を行い、平成8年度以降、「近代蟹江の群像」、「明治・大正・昭和の世相と小酒井不木」、「小酒井不木の世界」等の特別展を順次開催し、期間中は郷土の文化人に関心のある方々のご来場をいただきました。その他常設展示においては、文化人に関するコーナーを設置し一般公開を行ってまいりました。

その後も関係資料を購入するとともに、小酒井不木遺族小酒井美智子様、江戸川乱歩遺族平井隆太郎様、平井憲太郎様、書道家飯田棲山様などを始めとする関係各位から当館の資料収集活動にご理解をいただき貴重な資料の寄贈をいただきまして、館蔵資料は年々充実してまいりました。

今回の特別展示では、小酒井不木、林稼亭を始めとする当町出身の文化人の他、蟹江町に縁のある作家吉川英治などの関連資料も併せて展示を行いました。

蟹江の水郷情緒の豊かな景観を「東海の潮来」と名付けたのは、戦中戦後の一時期に当地を訪れた吉川英治であり、現在蟹江川右岸堤防に「佐屋川の 土手もみちかし 月こよひ」の文学碑が建立されています。

また、第11代・13代蟹江町長の故山田平左衛門氏から寄贈されました川合玉堂、荒川豊蔵、鬼頭鍋三郎関係の美術工芸作品もこの度、蟹江町縁の資料として展示を行っています。

今回の特別展開催により、「ふるさと蟹江」の一層の文化向上のため、皆様の関心を高めていただくことを期待しまして、ここにご挨拶申し上げます。

平成18年11月吉日

蟹江町歴史民俗資料館

○ 小酒井不木

医学博士 探偵小説家

明治23年(1890)10月8日生まれ、新蟹江村(蟹江新田)出身。父は新蟹江村村長小酒井半兵衛。県立一中・京都三高を経て大正3年(1914)東京帝国大学医学部卒業。以後医学についての研究を続け、海外留学を経て英国ロンドンに在った時、咯血、大正9年(1920)東北帝国大学教授も発令だけで赴任にいたらず、大正10年(1921)以後は病勢は一進一退を続けたが、その後大正12年(1923)に名古屋に居を移し、文筆活動に入るにいたった。

ロンドン留学中、コナン・ドイルの作品に接して以後豊富な医学知識と推理によるいくつもの条件設定のもと、探偵小説に卓抜した筆の冴えをみせ、「疑問の黒枠」「紅色ダイヤ」などの作品を発表、多くの大人は勿論、少年雑誌を通して少年達にもその読者層を持った。結核との戦いを体験し、医者として、患者の立場として執筆した「闘病術」は、当時の世相を反映し、ベストセラーとなった。

また、江戸川乱歩処女作「二銭銅貨」を絶賛して、乱歩への文筆活動への援助を行うなど、探偵小説家を志す後輩の育成などにも貢献したことで知られている。

俳句にも情熱を注ぎ、拈華俳句会の発起人として、会の名付け親(仏教用語で以心伝心)としても有名である。



小酒井不木俳句掛軸

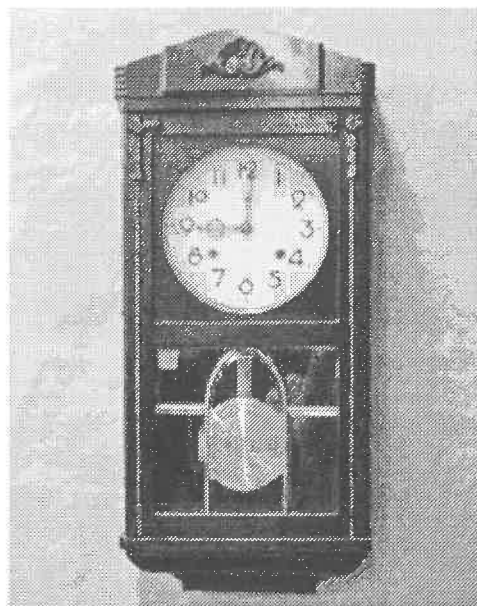
昭和4年(1929)3月27日風邪気味にて発熱就床。同年4月1日急性肺炎を併発、惜しまれつつ逝去した。享年39才。

平成16年(2004)4月3日、蟹江町図書館敷地内に有志により「小酒井不木生誕地碑」が建立された。

蟹江町歴史民俗資料館特別展示

昭和のくらし

～ちょっと昔にタイムスリップ!!



平成19年2月6日(火)～3月18日(日)

(月曜・祝日休館) 午前9時～午後5時

主催 蟹江町教育委員会

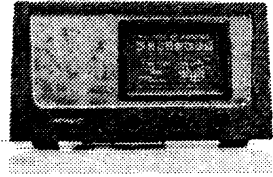
問い合わせ先 生涯学習課歴史民俗係(歴史民俗資料館)

電話 0567-95-3812

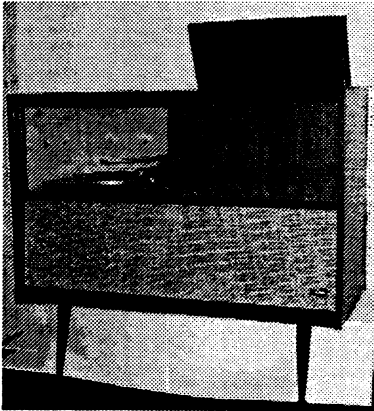
電化製品が家にやってきた！

このまちに「電気」がきたのは約100年前。最初はまちを明るく照らす街灯でした。やがて家の中の明かりもランプから電灯に変わり、昭和になり、いろいろな電化製品が生まれ、家庭にやってきました。

昭和のはじめ、いわゆる電化製品としてまず各家庭に普及したのがラジオ。昭和30年代にテレビが普及するまではラジオが大きな情報源であり、娯楽でした。電化製品＝ラジオであり、古くからある電気店は、「〇〇ラジオ店」という店名のところが多くありました。



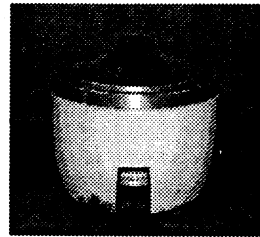
昭和20年代のラジオ



家具調ステレオ

テレビが登場してからいろいろな電化製品が生まれ、白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫は「三種の神器」といわれました。しかしまだまだ電化製品は高級で、あこがれの品でした。近くにテレビを買った家があると近所の人たちが集まってきて正座をして見たといいます。当時のテレビやステレオには重厚な家具調仕様になっているものもあり、家のインテリアの中心的存在としても鎮座していました。

また、洗濯機や冷蔵庫、アイロン、炊飯器などは、家庭の主婦にとってそれまで全て手作業でおこなっていた家事の負担をかなり軽くすることになり、家庭での生活スタイルを一変するものとなりました。



電気炊飯器